

日 点 委 広 報

日 本 の 点 字

第 7 号

日本点字委員会 1979年11月1日発行

東京都新宿区高田馬場 1-23-4 日本点字図書館内

日本点字委員会事務局

TEL (03) 209-0241

目 次

会長あいさつ	2
第13回日点委総会報告	4
点字表記法の改正点	6
点字楽譜専門委員会仮決定事項	17
盲学校高等部普通科用点字教科書の 表記に関するアンケート調査の結果から	21
あとがき	27

会長あいさつ

本間 一夫

点字は盲人にとって 唯一の かけがえのない文字であります。日本だけでなく、欧米諸国においてもまったく同様であり、点字なくしては 盲人の教育も文化も そして福祉も なりたないのではありません。エレクトロニクスの世界が 非常に発展した今日、talking book が非常に進歩し普及してきたことは 確かですが、しかもなお最近 paperless braille の研究が大きく登場してきたことは、点字がいかに必要であるかを 何よりもよく物語るものと言えるのであります。

さて 日本でのその「点字の書き方」に最も大きな役割を果たしているのが 我が日点委であります。私は 半年前、はからずもその会長に推され 責任の重さを痛感しているこのごろであります。

当然のことながら、点字を読む盲人の皆さんから本会に寄せる期待と関心は 非常に大きいことは、私はよく知っております。それだけに、点毎紙上などで 時に見られるように ある種の不安を多くの皆さんが感じられることもよくわかります。それは長年慣れ親しんできた「書き方」を あまり変えられては困る、そういう声に集約されてくることは当然であります。

たしかに近々本会から発行される「点字表記法」には 若干の改正点があります。しかしそれは 過去数年の間、委員たちが十分に考え、慎重に意見を斗わせた結果 得られた結論なのであります。始めはいささかなじめなくても、実際に皆さんの書き方に取り入れて下さるならば、例えば 句点使用のごとき 必ず その良さと合理性とを感じとり 認めて下さるであります。

しかし私は 書き方をしばしば 変える ことには 決して賛成できま

せん。書き方を変えることによって点字図書が著しく薄くなるとか、点字の読み書きが明らかに速くなるとかいうならば、それは私も大賛成です。しかしそうでない限り、永く慣れ親しんできた書き方を変えることには意義を見出し得ません。一例だけあげても「書き方を変える」ことはその書き方に関する限り、今全国の点字図書館や盲学校に蔵されている100万冊に近い点字書とこれから作られる多くの点字書との間に一線を画することになってしまうからです。それは決して点字読書人たちのプラスにはつながりません。

私は保守的かもしれませんが、これからそういう方針になって広く声なき声にも耳を傾けながら、会の発展を計っていきたいと念願しております。

日本点字委員会 第13回総会報告

日本点字委員会では 1979年 8月24日・25日の両日、大阪
市立労働会館において 第13回総会を開催し、次のことを協
議した。出席委員は本間一夫会長をはじめ 19名、オブザーバ
は 7名であった。

1. 「改訂・日本点字表記法」原案の検討

「改訂 日本点字表記法」の編集委員会の原案について、
百の位の数字の書き方、小文字の取り扱いなど細部の教
項目について協議し、「改訂 日本点字表記法」の執筆および
編集に生かすこととした。

2. 点字楽譜専門委員会関係

我国における点字楽譜の統一を目指して 1978年 2月に発足
した点字楽譜専門委員会は、このたび「和音の記載法」など
教項目について決論を得て、今回の総会に報告があった。
日本点字委員会ではこれを最終決定とせず、中間報告として
公表し、広く意見を聞くことにした。中間報告の内容は
「点字楽譜専門委員会 中間報告」として後に掲載するとおり
である。

またこの分野においては、邦楽・洋楽の両面にわたり多くの研究
課題を残しているため、今後とも専門委員会を存続して研究
協議を続けることとした。なお今回の総会で、日本点字委員会か
ら派遣する専門委員のうち、これまでの永井昌彦委員（京盲）に
代って金子昭委員（平塚盲）が新たに選出された。その他の
専門委員は従来通りである。

3. 世盲協 数学・科学専門委員会の設定

世界盲人福祉協議会の各種委員会の一つである世界点字協議

会の数学・科学専門委員会（本部はスペイン）から、日本の代表委員 7名を決定されたいという申し入れがあり、今回の総会において次の 6名の日本代表委員を決定した。

尾関育三（筑波大学附属盲学校）、岩崎英正（埼玉県立川越図書館）、木塚泰弘（国立特殊教育総合研究所）、鳥山由子（筑波大学附属盲学校）、長岡英司（国立職業リハビリテーション・センター）、宮田信直（日本ライトハウス）

なお委員 1名は欠員とし、日本代表委員の委員長は尾関育三委員に決定した。

4. 日点委広報「日本の点字」の編集について

日点委広報「日本の点字」は、この第7号から毎年11月1日の点字記念日に定期的に発行することとし、全国の各盲学校および日盲社協の関係施設にそれぞれ1部ずつ寄贈するほかは、点字・墨字とも有料とすることを確認した。これまでの手書きによる印刷方式の改善や内容の充実についても意見が出されたが、いずれも財政問題がからむので今後の課題として検討することになった。

5. 「改訂 日本点字表記法」等の発行について

明1980年はブライユの点字が石川倉次によって日本訓盲点字に翻案されて90周年目にあたる。これを記念して「改訂 日本点字表記法」を1月1日付で刊行するほか、「点字数学記号解説」、「点字理化学記号解説」、「外国語点字解説」等を引き続き発行することとした。

点字表記法の改正点

これは「改訂 日本点字表記法」に掲載される具体的な改正点のみをとり出してまとめたものである。一覧表も付けてあるので参考にしていただきたい。

日本点字委員会は、昭和46年に点字表記の統一を目的として、「日本点字表記法」を編さん刊行したが、短期間での作業のためいくつかの問題点を残しており、関係者から改訂の必要を求められていた。そこで本委員会は数年来広く一般の意見も聞きながら研究討議を重ねてきたが、昨年11月1・2日に開かれた第12回総会で結論に達し、改訂版編さんの運びとなった。しかしその後の作業が予測しえなかった事情もあって思いのほか手間どっているので、ここに主な改正点を要約して記すことにする。改正点を含む表記法全体の詳細については、来春発行予定の「改訂 日本点字表記法」を読んでいただきたい。

I. 点字記号とかなづかい

1. 特殊音

「日本点字表記法」に表示された特殊音27のうち5音を変更し、1音を追加して28音とする。すなわち、

ティ	→		(パーティー)
ディ	→		(ディスカッション)
トゥ	→		(トゥピース)
ドゥ	→		(ドゥリーム)
ヴ	→		(ナイーヴ)

イエ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ (イエルサレム)

以上のうち、「ティ・ディ・トゥ・トウ」はアルファベットとの混同をさけるため、「ウ」は小文字を含まないので変えた。また「イエ」は比較的頻度が高いので加えた。

2. 小文字符

小文字符は ≡ を ≡ に変更する。しかし小文字符は触覚的になじみが薄いので、カナタイプライターのテキスト等特別の場合のほかはできるだけ用いないことにする。

3. 長音のかなづかい

点字のかなづかいはできるだけ現代かなづかいに対応させ、その上でそれとの相違点を確認した。その結果、長音のかなづかいで改正されたのは主としてオ列の長音である。

各列長音のかなづかいは次の通りである。

ア列の長音は「ア」を添えて書く。 例. オカアサン

イ列の長音は「イ」を添えて書く。 例. オニイサン

ウ列の長音は長音符を用いて書き表わすが、動詞の語尾は「う」を書く。 例. クーキ(空気) (着物を)ヲウ (菓子を)クウ

エ列の長音は「エ」を添えて書くが、漢字音は「イ」を書く。

例. オネエサン セイメイ(姓名)

オ列の長音は長音符を用いて書き表わすが、動詞の語尾は「ら」を書く。また歴史的かなづかいで「ホ, ヲ」と書いた和語とその派生語は「オ」を添えて書く。

「オ」を添えて書く和語の一覧表

オオイ オオウ オオキイ (し)オオス オオセ
オオカミ オオバコ オオムネ オオヤケ オオヨソ
コオリ(郡) コオル トドコオル コオロギ トオ(10)
トオイ イトオシイ トオル イキドオル ホノオ

ホオ　ホオ(の木)　ホオズキ　モヨオス

〔注意〕 次のような語は 接頭語が ついたものであるから、
長音符を用いない。　例. オオクリ　オオシエ　オオモイ

【許容】 教科書や公けの文書以外では、ア列・エ列およびオ列
の和語の長音を、従来の慣習上 長音符を用いて書き表わしても
よい。特に人名や地名などの固有名詞では 判断がしにくいので、
公けの場合であっても これらを 誤りとはしない。

例. オカーサン　オネーサン　オーキイ

擬声語、外来語、外国語の長音は、各列ともに長音符を用いて
書く。

例. カーカー　ズシーン　メーメー　セシナーデ　ビーズ
セールス　コーヒー

II わかち書き

わかち書きについては、まず最初にわかち書きの原則を定め、これ
に基づいて個々の問題を検討したが、その結果 助動詞「うた」
の扱いを除いては それほど大きな変更はなかった。

1. わかち書きの原則

点字で書くときは、意味の独立する言葉(自立語)は前を区
切って書き、助詞・助動詞は自立語に続けて書く。接頭
語や接尾語は自立語に付けて書くことを原則とするが、意味
を明らかにするために 離して書くことがある。自立語のうち、
長い複合語や固有名詞は 内部の意味のまとまりごとに区切る
が、つなぎ符をはさんで 続けて書く。

2. 助動詞「ようた」の扱い

「ようた」はこれまで 前を切って書いたが、上記のわかち
書きの原則に従い、助動詞「うた」は自立語に続けて書くことにする。

例. トブヨーニ　ハナノヨーダ　ソノヨーナ□コト

III 文章記号とその用法

日本の点字が翻案された明治時代までは墨字の世界でも句読法はあまり用いられていなかったが、最近では文章表現の内容を規定するものとして重要な位置を占めるようになってきている。点字の句読法は明治時代の墨字に対応したままであったため、その後変化した墨字の句読法との間に大きな開きを生じてしまった。ごく最近になって、文章の内容を正確に読みとる必要から、点字の句読法の重要性を痛感する人々が多くなってきている。そのため今回、墨字との対応と点字の触読性を考慮しながら、文章記号の修正と追加を行なった。

1. 句点・疑問符・感嘆符

文の終りには句点 ⠠⠨ ・疑問符 ⠠⠨⠠ または感嘆符 ⠠⠨⠠⠨ をつけ、その後は2マスあける。ただし見出しなどの順序を示す記号のあとの読点や半がっこに句点を代用する場合は文末ではないから1マスあけてもよい。

- 例. ⠠⠨⠠⠨⠠⠨ \square ⠠⠨⠠⠨ 1. 名詞
 ⠠⠨⠠⠨⠠⠨ \square ⠠⠨⠠⠨⠠⠨ 2. 動詞
 ⠠⠨⠠⠨⠠⠨ \square ⠠⠨⠠⠨⠠⠨ a. 主語
 ⠠⠨⠠⠨⠠⠨ \square ⠠⠨⠠⠨⠠⠨ b. 述語

感嘆符や疑問符が文中にある場合はそのあと1マスあける。

例. アッ! \square ト \square サケンダ。 ムスメ? \square センドーサン。

2. 読点・中点

読点 ⠠⠨⠠ 、中点 ⠠⠨⠠⠨ の使用は、これまで点字の世界ではなじみが薄いので、今後の課題として残るであろう。ここではこれらを使用する場合と使用しない場合の二つに分けて記述する。

(1) 読点・中点を使用する場合は、その用法は現代国語の句読法に従うことを原則とするが、点字表記の独自性からみて不必要な場合は省略する。

例. $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$ (2,3日)

(2) 読点・中点を使用しない場合は、意味の理解を容易にするために必要に応じて2マスあける。

例. シャカイ□カガク $\begin{matrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{matrix}$ □シューキョー□テツガク
 = シャカイ□カガク□□シューキョー□テツガク
 ココロノ□マズシイ□ヒトタチワ $\begin{matrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{matrix}$ □サイワイデ□
 アル $\begin{matrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{matrix}$ □テンゴクワ□カレラノ□モノデ□アル $\begin{matrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{matrix}$
 = ココロノ□マズシイ□ヒトタチワ□サイワイデ
 アル□□テンゴクワ□カレラノ□モノデ□アル $\begin{matrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{matrix}$

3. 矢印

語句や文の関係を示すつなぎ符 $\begin{matrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{matrix}$ ・波線類 $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$ ・棒線 $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$ の用法に変更はないが、矢印(右向き $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$, 左向き $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$, 両向き $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$)をそれぞれ、 $\left[\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}, \begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}, \begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix} \right]$ に変え、必要に応じて $\begin{matrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{matrix}$ を増減することができるとした。

4. カギ・指示符・星印

文や語区の全部または一部を引用したり強調または指定する場合、墨字ではさまざまな形の「カギ」類で「くく」ったり、線や点を横や下に添えたり文字の大きさや字体を変えたりしている。点字はこれに対応するのに「カギ」や指示符の種類が少ないので追加し、次のような名称を付した。

$\begin{matrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{matrix} \sim \begin{matrix} \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot \end{matrix}$ 第1カギ $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix} \sim \begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$ 第2カギ
 $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix} \sim \begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$ ふたえカギ
 $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix} \sim \begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$ 第1指示符
 $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix} \sim \begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$ 第2指示符
 $\begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix} \sim \begin{matrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{matrix}$ 第3指示符

しかしこれらの記号の用法はきびしく規定せず、従来のカギの用法を基準として、全体的に不統一にならないように注意しながら適宜使い分ける。

星印 ⋯⋯ は特に注意を引く必要のある段落やか条の前に記し、そのあとは1マスあける。

例. ⋯⋯⋯ ツギノ ⋯ コトニ ⋯ キヲ ⋯ ツケテ ⋯ カヨ。

5. かっこ・段落挿入符・文中注記符

語句や文の説明に用いられる記号のうち、点訳者挿入符 ⋯⋯ ～ ⋯⋯ および棒線 ⋯⋯ の用法については変更がないので、残る3種類の記号について記す。

- (1) かっことは ⋯ ～ ⋯ 第1かっこ
 ⋯⋯ ～ ⋯⋯ 第2かっこ
 ⋯⋯ ～ ⋯⋯ 二重かっこ

の3種類とする。第1かっこは墨字の()に対応し、二重かっこは()の中のかっこでその用法はこれまでと変りない。第2かっこは第1かっこと区別して他のかっこを必要とする場合に用い、その用法は第1かっこと同じである。

(2) 段落挿入符 ⋯⋯ ～ ⋯⋯ は、本文の要約、前文、詳細な説明、ト書きなどを本文とは段落を変えて挿入する場合に用いる。墨字では段落を変えるとともに、文字の大きさや字体を変えている場合が多い。この記号の用法は、行頭から2マスあけて3マス目から開き記号をしるし、その後1マスあけて挿入文を書き、1マスあけて閉じ記号を記す。この場合終りが句読点でも1マスあけて閉じる。

例. ⋯⋯⋯ コドモノ ⋯ サンスーヲ ⋯ ミテ ⋯ ヤル ⋯ マエニ ⋯ ヨンデ
クダサイ。 ⋯⋯

(3) 文中注記符 ⋯⋯ は欄外の注と対照させる場合に、その語句の直後に続けて記し、その後はわかち書きの規則に従う。

なおその注に番号が付く場合には ㉔と ㉕ の間に 数字をはさむ。

例. ㉔ノ㉕ツイタ㉖ゴワ㉗カンマツノ㉘「ヨーゴ㉙カイセツ」ニ
オイテ㉚セツメイサレテ㉛イル。

トージノ㉜アメリカノ㉝ダイトリーヨ ㉞㉟㊱㊲

㉓㉔ワがハイワ㉕ネコデ㉖アル㉗㉘㉙㉚㉛ト

㉜㉝マイヒメ㉞㉟㊱㊲ ---。

㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲

㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲

〔注意〕文中注記符を用いる場所は語句や文の直後とするが、点訳などで原本に忠実にする必要のある場合は、文頭や語頭または語中などに用いてもよい。

6. 空欄記号・伏字記号

語句や文の省略を示す記号のうち点線と棒線の用法については変更がないが、空欄記号と伏字記号が新たに追加された。

(1) 空欄記号 ㉔㉕㉖㉗㉘ は、学習書や試験問題などで"かくされた語句や文または記号などを表わす場合に用いる。空欄記号の前後の切れ続きは、わかち書きの規則や他の文章記号の用法に従う。空欄の中やそばに数字やアルファベットまたはかななどの記号がある場合には、空欄記号の前に付けて書く。なお空欄の大きさをばくせんと表わすために中の ㉔ を増減したり、空欄の数をはっきり示すために ㉔㉕㉖ をその数だけ続けて書いてもよい。

例. ツギノ㉔㉕㉖㉗ニ㉘テキトーナ㉙ゴヲ㉚イレヨ。

A. ㉔㉕㉖㉗㉘ノ㉙3.14 バイデス。

B. ㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲ミリアンペアノ
5バイデス。

(2) 伏字記号は 語句の一部または全部をかくしたことを表わす。必要がある場合に用い、次の五つがある。

すなわち ○ は ⋮⋮ 、△ は ⋮⋮ 、□ は ⋮⋮ 、× は ⋮⋮ 、その他必要な場合は ⋮⋮ をあてる。これらの伏字記号はそれぞれ一つの伏字記号と対応しているから必要な数を用いることができる。しかしながら 伏字記号は 必要を生じたときのために準備したものであるから、その使用は 必要最小限度にとどめる。なおこれらの記号は 伏字のために用いるのであるから、形が同じでも ○印や ×印のために用いてはならない。

連続する 数字の一部に伏字がある場合には それらをすべて ⋮⋮ で書き表わす。また虫食い算などで桁数を合わせる必要がある場合は、誤解のおそれがない限り前置点の ⋮ を省いて ⋮ だけで書き表わすことができる。数字の伏字は 数符の中だけで有効であるから、この伏字が数字の最後にきた場合には、次に数字と同形の ア行とラ行の文字がくれば つなぎ符をはさんで続ける。

例. ⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮ ネン (19XX年)

⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮⋮ □□ノ□フセジニ□アテハマル□スージヲ□イレヨ。

7. 詩行符

(1□ - 8 = 7)

詩行符 ⋮□□ は 行替えせず^にに 詩を書き流したときの 行と行の切れ目を示す記号で 前に続けて書き、その後を 2マスあける。また連を表わす場合には 行替えを主とするが、 ⋮⋮□□ を続けて書いて 後を 2マスあけて表わすこともある。

例. カラマツノ□ハヤシヲ□スギテ、 ⋮□□ カラマツヲ□シミジミト
ミキ。 ⋮□□ カラマツヲ□サビシカリケリ。 ⋮□□ タビ□ユクワ
サビシカリケリ。 ⋮⋮□□ カラマツノ□ハヤシヲ□イデテ ⋮
カラマツノ□ハヤシニ□イリヌ。 ⋮□□ カラマツノ□ハヤシニ□イリテ ⋮
マタ□ホソク□ミチヲ□ツツケリ。 ⋮⋮□□ ・・・

(注. 2連めは 読点省略の例。)

点字記号一覧表

この表は「改訂・日本点字表記法」に表示される点字記号である。

1. 50音・濁音・半濁音 など

あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や		ゆ		よ
ら	り	る	れ	ろ
わ	ゐ		ゑ	を
ん				

か	ぎ	ぐ	げ	ご
ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
だ	ぢ	づ	で	ど

は	ひ	ふ	へ	ほ
は	ひ	ふ	へ	ほ

2. 拗音・拗濁音・拗半濁音

きゃ	きゅ	きょ	ぎゃ	ぎゅ	ぎょ
しゃ	しゅ	しよ	じゃ	じゅ	じょ
ちゃ	ちゅ	ちよ	ちゃ	ちゅ	ちよ
にゃ	にゅ	にょ			
ひゃ	ひゅ	ひょ	びゃ	びゅ	びょ
みゃ	みゅ	みょ	ひゃ	ひゅ	ひょ
りゃ	りゅ	りょ			

* 小文字符

注. 拗音や特殊音を書き表わす場合、墨字では小文字を用いるが、点字には独自の表記があるので、小文字符は特別の場合以外は使用しない。

3. 特殊音

			い	
			しえ	じえ
てい		ちえ		てい
		てゅ		てゅ
うい		うえ	うお	
くあ				くあ
つあ	つい		つえ	つお
ふあ	ふい		ふえ	ふお
		とウ		ドウ

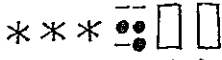

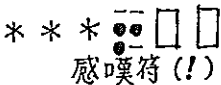

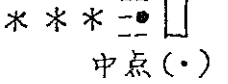
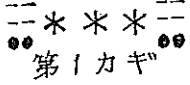
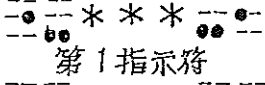
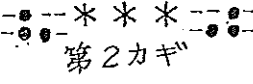
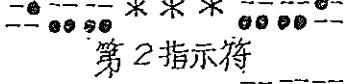
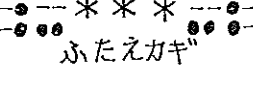
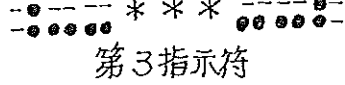
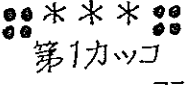
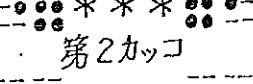
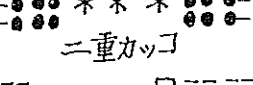
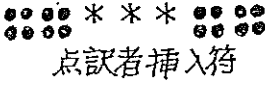
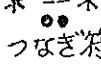
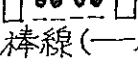
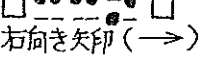
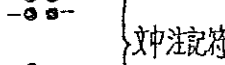
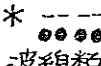
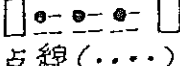
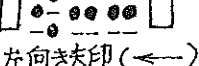
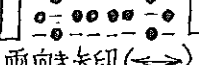
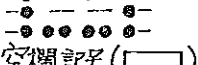
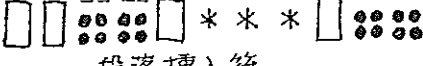
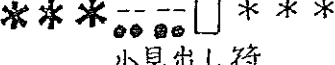
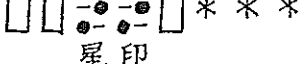
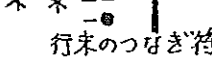
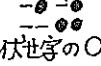
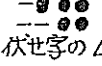
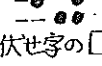
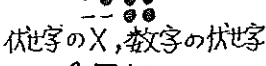
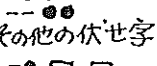

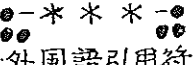
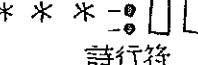

5. 数字および算数記号

1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
10		100		1000		12345			

[算数記号]

小数点(.)	位取り点(,)	+	×	÷	=
分数線($\frac{*}{*}$)	比(*:*)	2乗(* ²)	3乗(* ³)		

4. 文章記号（句読点など）

 <p>句点(。)</p>	 <p>疑問符(?)</p>	 <p>感嘆符(!)</p>		
 <p>読点(、)</p>	 <p>中点(・)</p>			
 <p>第1カギ</p>		 <p>第1指示符</p>		
 <p>第2カギ</p>		 <p>第2指示符</p>		
 <p>ふたえカギ</p>		 <p>第3指示符</p>		
 <p>第1カッコ</p>				
 <p>第2カッコ</p>				
 <p>二重カッコ</p>		 <p>点読者挿入符</p>		
 <p>つなぎ符</p>	 <p>棒線(—)</p>	 <p>右向き矢印(→)</p>	 <p>文中注記符</p>	
 <p>波線類(～)</p>	 <p>点線(.....)</p>	 <p>左向き矢印(←)</p>		
	 <p>両向き矢印(↔)</p>	 <p>空欄記号(□)</p>		
 <p>段落挿入符</p>	 <p>小見出し符</p>			
 <p>屋印</p>			 <p>行末のつなぎ符</p>	
 <p>伏せ字の○</p>	 <p>伏せ字の△</p>	 <p>伏せ字の□</p>	 <p>伏せ字のX, 数字の伏せ字</p>	 <p>その他の伏せ字</p>
 <p>外字符</p>	 <p>外国語引用符</p>	 <p>詩行符</p>	 <p>二重詩行符</p>	

点字楽譜専門委員会 仮決定事項

標記委員会は、我國における点字楽譜の統一・普及を目的として去る昭和53年2月3日に発足し、これまでに全体会3回・小委員会2回を開いて、和音の記譜法など当面解決を迫られていた諸事項について審議を重ねた結果、このほど次に示す事項について結論を見出すことができた。専門委員会では、これらの原案を正式なものとするため、昭和54年8月24日に開かれた第13回日本点字委員会総会に提案し承認を求めたところ、総会ではこれら原案を仮決定とし、正式決定を次期総会まで“延ば”すこととなった。専門委員会の原案について、関係者各位の率直なご意見を賜れば“幸いです”。

仮決定事項

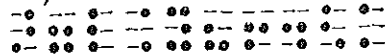
1. 和音の記載法について

(1) 初心者用および一般向けの楽譜は〔音符法Ⅰ〕によって記し、専門的な楽譜は〔音程法〕によって記すことを原則とする。

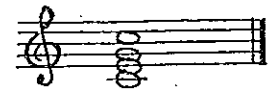
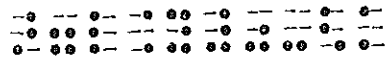
(2) 教科書については、〔音符法Ⅰ〕を採用するものとする。

【音符法の例1.】(世界点字楽譜解説例70)

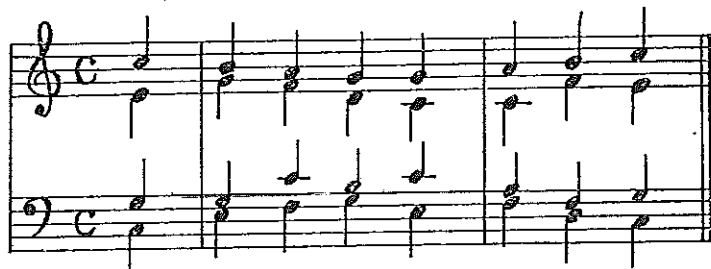
音符法

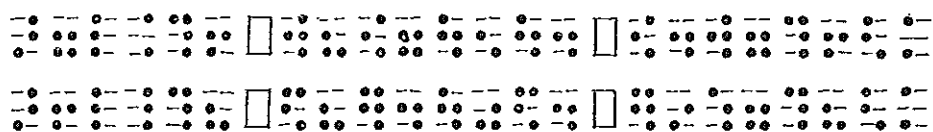


音程法



【音符法の例2.】(世界点字楽譜解説例71)





2. 日本歌曲における 歌詞と音符との 結びつき について

(1) 歌詞の 1 音節で、旋律の 2 音符以上を 付けて歌うときは、その音節の後に 音符の 数に 応じて 必要数 $\overline{\overline{\quad}}$ を 記す。

【日本歌曲の例 1.】

赤 と ん ぼ

三木露風 作詞
(原曲 変ホ長調) 山田耕筰 作曲

$\text{♩} = 60$ *p* *mf*

ゆうやけ こやけの あかとんぼ

(2) 1 音符で 2 音節以上の歌詞を 付けて歌うときは、その音節を $\overline{\overline{\quad}} \sim \overline{\overline{\quad}}$ ではさむ。なおこのとき、2 音節を歌う音符の後には $\overline{\overline{\quad}}$ を 記し、3 音節を歌う音符の後には $\overline{\overline{\quad}}$ を 記す。

〔日本歌曲の例 2.〕

ぞうさん

まどみちを 作詞
団 伊玖磨 作曲

ぞーさん ぞーさん おはながながいのね

(3) 教科書において、前 2 曲の方法は 中学部以上の段階から採用することが望ましい。

〔注 1〕 歌詞の長音・促音・撥音は、いずれも 1 音節とする。

〔注 2〕 前記 (1)~(3) は、「世界点字楽譜解説」の 285 項 (声楽) に追加すべき事項である。

3. ギターなどの楽譜に用いるコード・シンボルについて
短縮楽譜形式のコード・シンボルについては、「世界点字楽譜解説」の表 32. に掲げている点字楽譜としての記号のほか、一般に五線譜で用いている文字や数字による記号をそのまま記すことも認めることとする。

ドナ ドナ

安井 かずみ 作詞

シロム セクダ 作曲

Moderato

mp Em Am Em Am Em Am Em B7

あるはれた ひるさがり いちばへつ づくみち

盲学校高等部普通科用点字教科書の 表記に関するアンケート調査の結果から

筑波大学付属盲学校では、今年の5月に全国の盲学校71校にあてて、盲学校普通科用の点字教科書の表記について次のようなアンケート調査を行った。

現在使用されている高等部普通科の点字教科書は日本ライトハウスと東京点字出版所から発行されており、点字の表記に関してはその出版社の方針にまかされている。一方小中学部用の点字教科書は、文部省著作の教科書であり、日本点字委員会で定めた点字表記法に基づいて印刷され発行されている。したがって小中学部用の点字教科書と高等部用の点字教科書とで表記法に相違があり、盲学校の国語科担当の教師の間ではこれまでに研究会の折などにしばしば問題にされていたことであつた。そうしたことから今回のアンケート調査の実施になったものである。

アンケート調査は郵便はがきによるもので、調査項目は次のとおりである。

1. 高等部用教科書の点字表記法は小中学部の教科書の表記と同じにする方が望ましい。

2. 高等部用教科書の点字表記法は小中学部の教科書の表記法と異なる点があつても差支えない。

3. 高等部用教科書のうち少くとも国語科の教科書だけは小中学部用教科書と同一の表記法がよい。

4. 昼語符の使用について。

ア. 現状通りでよい。

イ. 用いない方がよい。

ウ. その他

(以上のうち、該当項目に○印を付けてください。)

5. その他点字表記法の問題で“ご意見がありましたら宛名面の記入欄にお書き下さい。

アンケートの内容は57校(回収率80%)から寄せられ、その結果は次のとおりである。

1. 高等部用の教科書の点字表記法は小中学部の教科書の表記と同じにする方が望ましい、とするもの ----- 45
2. 高等部用教科書の点字表記法は小中学部の教科書の表記法と異なる点があっても差支えない、とするもの ----- 7
3. 高等部用教科書のうち 少なくとも国語科の教科書だけは小中学部の教科書と同一の表記法がよい、とするもの ----- 11

合計が57校以上になるのは、たとえば“2.と3.の両方に○印を付けて回答した学校が数校あったためである。

また疊語符についての回答結果は次のとおりであった。

- ア. 現状通りでよい ----- 21
- イ. 用いない方がよい ----- 33
- ウ. その他 ----- 1
- 記入なし ----- 2

その他5.の点字表記法について寄せられた意見には、次のようなものがあった。

(1) 教科書の点字表記一般について

小中高とも教科書の場合は日点委で定めた表記法の本則に従って書いてほしい。 ----- 2

ことば自体は生徒の年齢と関係ないのだから、小学部生から同一のものを使用すべきだ”と考える。

原則として同一であることが望ましいが、発達段階も異なるゆえ、ある一定の規則を使った上での高等部用教科書の作成

を望む。

たてまえとして小中高統一すべきだが、実際問題としては異なる点があっても差支えないのではないか。

飛行元によって表記法が違ふのは望ましくない。

マスあけの仕方については、小中と高とで違いがあつてよい。

同一教科内では小・中・高統一してほしい。

各教科とも同じ表記法を用いることを望みます。

(2) 日点委に対する要望

表記法がよく変わるのを、あまり変えないでほしい。----- 2

小数点の表記を統一してほしい。

「日本点字表記法」の新刊を早く出してほしい。

日点委表記法の本則を整備すること。

理科・数学・音楽等の表記法を早く統一すること。また出版もしてほしい。----- 2

点字表記法を一本化(統一)していただきたいと思ひます。

全国的な記号統一を望む。

(3) 点字のかなづかい等について

才段の長音は現代かなづかいの方向に持って行ってほしい。

和語の工列の長音の表記法に、現場ではやや混乱がある。

古文は古典かなづかいを用いてほしい。

(4) わかち書きやマスあけについて

墨字4字の熟語は点字でも一続きにしてほしい。

行がえのとき、単語の途中で行がえをすべきではない。

形式名詞「こと」のわかち書きが統一されていない。たとえば東点の現国I.の中で「イウコトダケワ」が一続きになっていて、「ジショデ[]オボエタ[]コト」の方はマスあけがしてある。

助詞だけが行頭にくるのは許容の範囲とは思ふが、国語教科書では避けたい。

国語に関してのみ 単語は 続けて書いてもよい。句読点を付けてほしい。

(5) 句読法について

句点は必ずしも付けるようにしてほしい。----- 5

句点のあとのマスあけを統一してほしい。

句点のあと ニマスでなく、小学部 低学年では句点なしのニマスあけがよい。

句読点や中点の表記もしてほしい。

感嘆符・疑問符も使用してほしい。

(6) 畳語符について

高等部になれば文章の簡略化の意味で、畳語符はあってよい。

何でもくりかえしに畳語符を使うのは文法上あやまりである。

畳語符は漢字の表記法に従って用いる。

畳語符は将来略字表記法として一括して考えたらどうか。

(7) 点字出版所に対する要望

参考書などは出版社独自のものがあってもやむを得ないが、少くとも教科書は原則として日本点字委員会の決定した表記によるという出版社の意志がほしい。

理数系の教科書において、小数を示す符号など、古い表記になっているものもありますので、出版の際にはぜひ注意してほしいものだと思えます。

全国の点字出版物についても表記法の一本化をはかってほしい。例えば点毎の小数点の書き方、日点と東点のマスあけの仕方の違いなど。

すべての出版社が日点委の表記法に従うのが望ましい。---2

(8) その他

学校以外の所(特に点訳奉仕団体)で教えることは句点のない表記法が行われている。早くこの方面にも徹底した統一ができる。

ようにしたい。

アンケート調査を担当して

今回のアンケート調査を担当して感じたことや考えさせられたことなどを、三 簡単にまとめてみます。

まず教科書の表記については高等部用といえども小中学部用と同一の表記方法が望ましいということに圧倒的な賛同が得られたことは、当然のことながらうれしく思いました。付記していただいた点字表記に関する意見の中に、「参考書などは出版社独自のものがあってもやむをえないが、少なくとも教科書は原則として日本点字委員会の決定した表記によるという出版社の意識がほしい。」というご意見がありました。我が意を得たり、という感じで読みました。

日点委に対する要望事項については前にまとめられたようにいろいろなご意見が寄せられましたが、日点委は概ねご意向に沿った方向で動いています。ただ残念に感じたのは、日点委で検討されたことなどについては検討の経過をも含めてこれまでの「日本の点字」でお知らせしてあるのですが、周知徹底していかないのではないかと思われることです。たとえば「オ段の長音の表記を現代かなづかいと同じに」という方向や、「句点のあとのマスあけ」については、既に「日本の点字・第4号」でお知らせしていることなのです。「日本の点字」は日点委の広報誌ですので、点字・墨字とも1部ずつ必ず全国の盲学校、点字図書館、点字出版所にお送りしています。受けとった方が私物化することなく関係職員に回覧するなどの方法によって徹底方を計ってほしいものです。

畳語符については、点字の略記法の一環として今後日点委としても検討していかねばならない課題の一つと考えています。ただ今回のアンケートに「オニババ ㊦ト[]イワレル」（鬼は「は」、鬼は「は」

と言われる)、**「ガワニナル」**(がわがわになる)、**「よくも」**(よくもよくもよくも)の例を付記して調査したのに対し、現状どおりでよいという指示が回答数の3分の1以上あったのは意外でした。いずれの機会かにさらに詳しいご意見を聞かせていただきたいと考えています。

そのほか「表記法の本則を整備する」こと、「全国的な記号統一を望む」といったご意見のように具体的にどのような内容を指して言っているのかよくわからないものもいくつかありました。今回は狭いスペースに書いていただいた関係で詳しくお聞かせいただけなかったのかもしれませんが。来春発行される「改訂 日本点字表記法」をご覧いただいてさらに疑問の点などがありましたら日点委事務局までお知らせいただければ幸いです。

最後になりましたが今回のアンケート調査にご協力下さいました盲学校関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

(文責： 小林 一弘)

あ と が き

この「日本の点字」は、今後毎年11月1日付で定期的に発行するということが総会で決議されました。本年もその予定で進めていたのですが、編集その他の準備が思うにまかせず、ついに年末をむかえてしまいました。今後はこのようなことのないよう注意するつもりですから、どうかご了承承願います。

ご承知のとおり本誌は従来日点委の動きやその討議内容を中心に編集してきました。したがって発行日も一定せず、またページ数もその時々によって大きく相異してきました。今後この発行を定期化するに当り、ページ数もほぼ一定とし、またその内容も刷新していきたいと考えております。殊に日点委からの一方的な情報ばかりでなく、広く点字に対する意見や研究資料等をも求めて掲載していく考えです。この点に関しましても、多くの方々のご協力をお願いいたします。

「改訂 日本点字表記法」は原稿を書き終え、目下細部にわたって関東および関西の各編集委員の間で検討中です。1月半ばには成案を得て印刷にかかる予定ですから、今しばらくお待ち下さい。

11月27日には、筑波大附属盲に於て全国の盲学校教員を対象にして、日点委委員による新しい表記法についての説明会を行いました。約90名の参加があり盛会でしたが、その際に今回の改正点をまとめたものを資料として配布いたしました。本誌に掲載いたしました「点字表記法の改正点」はそのときの資料です。参考にしていただければ幸いです。

高等部普通科の点字教科書に関するアンケートは、盲学校教員の点字に関する関心度を知る上で興味ある資料だと思えます。従来個人的に、あるいは各種の研究会等において各出版社の表記についていろいろと意見を聞くことはありましたが、このような形で

まとめられたのは おそらく 最初の ことではないかと思われます。教科書は“かりで”なく、点字表記が統一され より良いものになっていくためには こうした声を 何らかの形で“出版に反映できるような方法も 考えなくてはならないと 思わされています。

今回のこのアンケート調査は 一つの試みとして 掲載したのですが、このような 研究資料をお持ちの方は ぜひ 日点委事務局にご連絡下さって、今後 本誌の充実に ご協力下さいますよう 重ねて お願いいたします。また 点字に関する 随想なども、スペースの許す限り 掲載したいと思しますので、それらをも お寄せ下さい。

1979年 12月 22日 (阿佐博記)